



教師の「ライフヒストリー」に迫る — 教員養成カリキュラム改革を展望しつつ —

教育学部 浅野 信彦



心理教育課程の設置に伴い、2004年に教育方法学領域の担当として着任した。初等中等教育のカリキュラム研究が専門である。学校の教育実践を直接の研究対象とする教育方法学は、教育学の様々な研究分野のなかで最も学校現場に近い位置にある。先生方の実践的なニーズに正面から向き合い、子どもの学びを深く捉え、授業とカリキュラムの改善につながる知見を導き出したい。教育学の理論と実践の統合をめざす「生きた学問」である。
(あさの のぶひこ)

近年、教育学者のあいだで「教師教育実践者」という自覚が芽生えつつある。大学教員が自らを実践者の立場におくと、学校現場の先生方と同じように、授業内容だけでなく「学生の学び」に目を向けざるをえなくなる。教育学の学びを通して教員志望の学生にどのような内面の変化が生じているのだろうか。それを検討するための事例を提供したい。

1. 教員養成カリキュラム改革の現状

近年の社会情勢は教員養成の在り方にも変革を迫っている。大学には、学生に教員として最小限必要とされる資質や能力を確実に身に付けさせることや、その質を保証することが求められている。従来の教員養成制度は、国が定めた教職および教科の単位を修得すれば、教員免許状が自動的に授与される仕組みであった。いいかえれば、教員免許状は、それを所持する者が一定の資質能力を保有していることを証明するものではなかった。こうした問題が社会に広く認識されてきた現在、大学が主体的に取りうる対応は、教員養成カリキュラムの改革である。目下、教員養成課程をもつ大学の多くで、「養成する教師像」の明確化、到達目標等の設定、授業内容の見直し、科目間の関連づけを図ることなどを中

心とするカリキュラム改革が進行中である。

カリキュラム改革においては、学ぶ側の視点に立つことが不可欠である。学生の視点から教員養成カリキュラムの改革を捉え、学生自身が「どんな教師になりたいのか」を常に問いながら、各科目で習得すべき知識・技能の内容や達成すべき水準を明確に意識して学ぶことが求められているということになる。学生自身が「めざす教師の姿」をイメージできるようにすること。これが鍵である。以下に紹介する「学習指導論」の授業は、まさにそれを目標にしている。

2. 「学習指導論」の概要

児童心理教育コースは小学校教員志望者が多い。このコースは、特定の教科ではなく「教育そのもの」を専門としており、学生は

学校教育の中心を担う実践力を備えた教員に育つことが期待される。彼らにとって教育学は教職科目だけではなく、専門性を支える学問領域の一つでもある。「学習指導論」は専門科目であり、小学校の教育実践に関心をもつ3年生が多く受講している。

この授業では、戦後教育に大きな足跡を残した10人の教師を毎回1人ずつ紹介していく。学生は3-4人のグループを組み、各グループが1人の教師を担当する。学生たちは発表日に向けて自主的に集まり、紹介する教師の授業の特徴、生き立ちや思想などを徹底的に調べる。私からは、その教師の授業の映像(DVD)を提供し、著書を何冊か貸し出す。こうして学生は、優れた教育実践を生み出した一人の教師の「ライフヒストリー」に迫っていく。彼らは、それまで想像することすら難しかった「教師の生きかた」にリアルに出会う。

毎回の授業ではほとんどの時間を学生の発表にあてている。各グループは、紹介する教師の授業の雰囲気や実践の特徴をなんとか伝えようと発表方法に工夫を凝らす。模擬授業を取り入れることとDVDの一部を視聴することを必須の条件としているが、それだけでは満足できないのか、グループワークや演劇的手法を取り入れるグループも多い。

これまで取り上げた人物は、大村はま、斎藤喜博、岸本裕史、向山洋一、有田和正、糸賀一雄、金森俊朗、善元幸夫、藤原和博、大瀬敏昭などである。



グループ発表の様子

3. 学生の変化－「生き方」を見つめ直す

ある学生のレポート「授業を振り返って」の一部を紹介する。この授業で出会った教師の「生きかた」に照らして、自らを見つめ直している学生の内面の変化が綴られている。

この授業を受けて、教師に対する考え方が変わった。この授業の初めは、岸本先生のように基礎基本を重視していた先生の紹介だった。私は教師には基礎基本をしっかり定着させる指導力が必要であると考えていた。そんな私の考えが大きく転換せざるを得なくなったのは、大瀬先生の「命の授業」からである。今までの先生が重視していた基礎基本とは何ら関係がないではないか、最初はそう思っていた。しかしその後、大村はま先生の発表を聞いて、今までの先生の共通点を見つけるとともに、自分の教師についての考えを整理することができはじめた。先生たちが最終的に子どもたちに身に付けてほしいと考えていた力とは、子どもが社会の中で一人で生きていく力だと気づいた。それを、基礎基本の学力の面から訴える先生がいたり、命を通して伝えようとしている先生がいたり様々だが、最終的な目標はそこにあるように感じた。そして、糸賀先生の考えに触れ、「社会の中で少しでも幸せに生きてほしい」、先生たちはそう願っていることに気づいた。さらに、先生たちは、自分というものを見失っていないということに気づいた。どの先生も、自分ができないことには取り組んでいない。そうではなく、自分にしかできないこと、自分だからできることの中で、子どもたちに伝えられることをできる限り伝えていように見えた。(中略)

「教師とは」－まだひとことでは言えず、なかなか整理することはできない。しかし、子どものことを第一に考え、子どもが社会で生きていく力を育むために、試行錯誤して授業に取り組み、その中で常に理想を持ち、理想を見失わず、教師としての自分とまっすぐに向き合っている姿が見えてきた。教師になることに不安はぬぐえないが、不安を感じることもより大切なことがある。それは、子どもたちに何を伝えたいのか、それを伝えるために自分だからできることは何なのか、ということと向き合っていくことである。